

A 年復活節第2主日 ヨハネ 20 章 19 | 31 節

【直訳】

19 さて夕方になって 週の初めのその日、

そして いくつもの戸が 閉じられて、

そこには いた 弟子たちが ユダヤ人への恐れのために、

来た イエスが、そして 彼は立った まん中に、

そして 彼は言う 彼らに、

「平和が あなたがたに」。

20 そして これを 言って、

彼は示した 両手とわき腹を 彼らに。

そこで 喜んだ 弟子たちは 見て 主を。

21 そこで 言った 彼らに 「イエスは」 再び、

「平和が あなたがたに」。

ように 遣わした 私を 父が、

私も 送る あなたがたを」。

22 そして これを 言って、 彼は息を吹きかけた。

そして 彼は言う 彼らに、

「受けなさい 聖霊を。

23 ある人たちの あなたがたが手放せば 罪を、

それらは手放される 彼らに関して。

ある人たちの あなたがたが保持すれば、

それらは保持されている。

24 さてトマスは 十二人の一人は、 呼ばれている者は デイデイモと、

いなかった 彼らと共に、 イエスが来たときに。

25 そこで言い続けた 彼に 他の 弟子たちは、

「私たちは見た 主を」。

すると 彼は言った 彼らに、

「もし 私は見なければ 彼の両手に 釘の跡を、

そして 私が入れなければ 私の指を 釘の跡へ、

そして 私が入れなければ 私の手を 彼の脇へ、

私は決して信じない」。

26 そして 八日の後に 再び いた 中に 彼の弟子たちは、

そして トマスは 彼らと共に。
来る イエスが、 いくつもの戸が 閉じられて、
そして 彼は立った まん中に、
そして 彼は言った、

「平和が あなたがたに」。

27 それから 彼は言う トマスに、

「持つてきなさい あなたの指を ここに、

そして 見なさい 私の両手を、

そして 持つてきなさい あなたの手を、

そして 入れなさい 私の脇の中へ、

そして 信じない者になるな、 そうではなく 信じる者に」。

28 答えた トマスは、

そして 言った 彼に、「私の主、 そして 私の神」。

29 言う 彼に イエスは

「あなたは私を見たので、 あなたは信じたのか。

幸いである 見ないで信じる者は」。

30 さて多くの そして 他の しるしを 行った イエスは 弟子たちの前で

ところの いない 書かれて この書物において。

31 だがこれらのことは 書かれた

ようにと あなたがたが信じる 次のことを

イエスは である キリスト 神の子、

そして ようにと 信じて いのちを あなたがたが持ち続ける 彼の名において。

「新共同訳」

19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。21 イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」22 そう言うてから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

24 十二人の一人でデイデイモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。25 そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」26 さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに

当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」28 トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。29 イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

30 このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。31 これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

①文脈

①ヨハネ 20 章は大きく二つの段落（1—18 節、19—29 節）に分けられる。どちらの段落でも、まず複数の弟子に関係する出来事が語られ、その後、ある個人に関わる出来事が語られる。

1—18 節

① 1—10 節 ペトロと「もう一人の弟子」が、墓が空であったことを確認する。

① 11—18 節 イエスがマグダラのマリアに顕現

19—29 節

① 19—23 節 イエスが弟子たちに顕現

① 24—29 節 イエスがトマスに顕現

しかも、すべての出来事が「週の初めの日（日曜日）」に起こっている。イエスの復活は集団と個人とを変える出来事であり、日曜日（祭儀）と関係する出来事である。

②構成

① 19—23 節

①この段落は 5 つの小段落に分けられる。a の最初の三行は出来事が起こった状況を述べる従属節であり、主文は「イエスが来た」である。この小段落のテーマはイエスの顕現が弟子に引き起こした変化を述べることにある。b と d の構成は同じであり、まずイエスの言葉を述べてから、その動作（「示した」と「息を吹きかけた」）を描いている。「平和があなたがたに」が繰り返されるが、単なる挨拶を超えた意味をもっている。b と d には含まれた c では、弟子の喜びが語られる。e では、平和と喜びに包まれた弟子に聖霊が与えられ、新たな使命と権能が授けられる。

② 24—29 節

②弟子たちは「私たちは主を見た」とトマスに告げるが、彼はそれをにわかには信じない。25 節のトマスの返答は、長い条件文と短い帰結文「私は信じない」からできている。この構文が強調するように、彼は客観的な証拠を求めている。

③八日後に再び弟子のまん中に立ったイエスは、証拠を執拗に求めたトマスに「いねいに語りかける。トマスはもはや試すこともせず、「私の主、私の神」と告白する。29 節のイエスの言葉は、イエスを見ることがない後の世代の人々への呼びかけである。

◎ 30 — 31 節

⑦ これは復活物語の結びであるばかりでなく、福音書全体の結びでもあり、福音書が著わされた目的をも明らかにしている。これが福音書全体の結びであることから、ヨハネの福音書はもともとは20章で終わっていたとも考えられる。

③ 復活者イエスの顕現（19 — 23 節）

② 弟子たちはユダヤ人を恐れて、戸（複数形）を閉ざしていた。この戸は家の戸であると同時に、彼らの心の「戸」でもある。恐れが彼らの心を閉ざしていたが、その彼らのただ中にイエスが「来た」。イエスは「平和があなたがたに」と挨拶して、彼の両手とわき腹を示し、もう一度「平和があなたがたに」と述べて、彼らに息を吹きかけている。挨拶と行動のこの繰り返しは単純な反復ではない。一度目の挨拶の後で、弟子は恐れから解放され、喜びに満たされている（20 節）。

① この喜び弟子たちに息が吹きかけられて、権能が付与される。だから、「平和があなたがたに」は日常の平凡な挨拶に留まらずに、それを超えた意味を持っている。これは14章の告別説教でイエスが約束していた「平和」（二四 27）の成就である。この「平和」が恐れを喜びに変える。

④ 喜びに浸る弟子たちがイエスの使命に参与するものとされる。父に派遣されたイエスは、弟子たちをこの派遣に招き入れ、「息」を吹きかける。これは弟子たちを新しく創造する「命の息」（創二 7）であり、すべての人をその汚れから清める霊の息吹でもある（エゼ三六 25 — 27）。イエスとの交わりは、イエスの死によって断たれることなく、復活によってさらに高められる。

⑤ イエスは「聖霊を受けなさい」と命じる。「霊」という語は、もともとは「息」を意味する。イエスに息を吹きかけられた弟子たちは、「霊」を受けたのである。それは果たすべき使命が与えられたしるしであり、その使命を完遂する力が与えられていることとしるしである。23 節 1 行目の「ある人たちの」は、動詞を飛び越して、行末の「罪を」にかかっている。どんな人の罪であれ、弟子たちが手放す（赦す）なら、その罪は不問に付される。

⑥ 23 節で「手放す」と訳した語は、「借金を）免ずる・放っておく・そのままにする」という意味を持っている。「罪を放っておく」ということから、「赦す」という意味が出てくるのだろう。「保持する」はここでは、「罪を捕まえておく」ことであり、「赦さない」の意味。罪を捕まえず、その手から放すとき、その代わりに人は他者をその手に得ることが出来る。そのような赦しをもたらすことができるのは、弟子たちがイエスから赦されているからである。弟子たちは罪を赦すことができるようにと霊を受けた。その力を用いずに、憎しみをそのまま残すのは愚かなことである。23 節後半のイエスの言葉は、罪を赦すようにとの勧めである。

④ トマスへの顕現（24 — 29 節）

② イエスが弟子たちに現れたときに、そこにいなかったトマスは、他の弟子たちが「わたしたちは主を見た」と証しするのを受け入れることができずに、復活の確証を求める。「わたしは決して信じない」は否定を強調する形で書かれている。トマスの言葉は、「わたしは見なければ：入れなければ：入れなければ：」と三度も念を押す。異常に長い条件文の後に、鋭く短い帰結文（「わたしは決して信じない」）が続いている。このような言い方はトマスの心をよく表している。彼は絶対的な証拠がなければ、復活は信じられないと考えている。

③ 八日後（つまり一週間後）に、トマスを含む弟子たちにイエスは再び現れる。19 節の「来た」は

不定過去形であったのに、26節では現在形が使われている。この現在形は描写に臨場感を与える現在形（歴史的現在）と考えられるが、この現在形の背後にイエスの出現への期待が込められているとする見方もある。この場合、19節での弟子たちは、18節のマグダラのマリアの言葉にもかかわらず、イエスの復活を信じられずにいたことが強調される。

◎この時もすべての戸が開ざされていたが、イエスは弟子たちの真ん中に立つ。19節とは違って、戸が開けられていた理由が何も述べられていない。戸が開けられていても、入ることができると描くことによって、よみがえったイエスのからだは、その両手とわき腹に傷跡を残す体であるが、しかし別のからだであることを示している。復活のイエスは地上のイエスと同一でありながら、別のレベルのいのちによみがえっている。イエスの復活は、もとの（再び死ぬことになる）体への蘇生ではなく、もはや死ぬことのないいのちへの復活である。

④イエスはトマスに語りかけ、手で触れて確認するようにと招くが、トマスはもはや触れて確かめようとはせずに、「私の主、私の神」と告白する。これは呼びかけであると同時に、「あなたはわたしの主、わたしの神です」という信仰宣言でもありうる。それに答えて、イエスは「見ないで信じる者は幸いである」と戒める。この言葉はトマスに向けられた戒めであるだけでなく、後代のキリスト者への励ましでもある。彼らは肉の目でイエスを見ることはできない。しかし、証しを受け入れて信じるなら、「幸い」な者となれる。

⑤ 結び（30―31節）

①ヨハネ福音書が書かれた目的は、イエスが神の子キリストであると「信じる」ためであり、また「信じて」いのちを持ち続けるためである。

②「あなたがたが信じる」は読み方の異なる写本がある（接続法現在と接続法不定過去）。現在形の場合、すでにイエスを信じている者が「信じ続けるために」の意味であり、すでに信じている人たちに語られたことになるだろう。不定過去形と取れば、まだ信仰に入っていない人々が「信じるように」という意味合いになる。ちなみに、四行目の「あなたがたが持ち続ける」は接続法現在である。

⑥ 私の主、私の神

①イエスが約束していた「平和」が今、現実のものとして弟子たちに与えられたことを、イエスの挨拶は示している。イエスの挨拶は恐れを喜びに変える「平和」をもたらす。この喜ぶ弟子たちに息が吹きかけられて、権能が付与されてゆく。神が「土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた」（創二・7）ように、イエスは弟子に息を吹きかけ、復活のいのちに生きる者へと新たに創造する。神の息は物事を新たにし、人をまったく新たな存在に変える。

②イエスは二度にわたって弟子たちに現れているが、そのいずれもが週の初めの日（つまり日曜日）のことである。週の初めの日はキリスト者が祭儀を行う日である。祭儀が行われるときにはいつも、イエスはその真ん中に立ち、「平和があなたがたに」と述べて、使命と権能を与え、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と呼びかける。十字架によって私たちの罪を贖ったイエスは、復活によって死に打ち勝ち、死をも超えた「平和」を私たちにもたらす。この「平和の主」と共に生きる者は、「私の主、私の神」と告白することになる。この告白は神の息が吹き込まれ、新たな使命を与えられた者が喜びのうちに言う告白である。